

2014年2月25日

各位

積水ハウス株式会社

株式会社住まいの図書館から、「住まい学大系」第103巻 「いえ 団地 まち」(木下庸子・植田実 編著)発刊

積水ハウス株式会社(社長:阿部俊則、本社:大阪市北区、以下「積水ハウス」)の完全子会社、株式会社住まいの図書館(社長:平林文明、本社:東京都港区)は、「住まい学大系」第103巻として「いえ 団地 まち 公団住宅 設計計画史」(木下庸子・植田実 編著)を発刊いたします。



株式会社住まいの図書館は、1986年の設立以来、住宅関連分野で活躍中の有識者や研究者の協力を得ながら、積水ハウスが長年にわたって蓄積してきた住宅に係る様々な研究成果等を「住まい学大系」として出版し、広く社会に発信してきました。

1999年の通巻100巻発刊をもって一旦その活動に区切りをつけ、以降は既刊の重版発刊に努めてまいりました。しかしながら、読者や関係者からの出版再開を望む数多くの声に応えるべく、2006年11月、建築学界の第一人者である鈴木成文氏による「五一C白書 私の建築計画学戦後史」を発刊し、「住まい学大系」第二期をスタートさせました。今般発行の「いえ 団地 まち 公団住宅 設計計画史」は第二期3巻目、住まい学大系・第103巻となります。

本書は、その名がよく知られている日本住宅公団、現UR都市機構の役割を探る資料集です。1955年の設立から現在まで、新しい集合住宅を日本全国に供給、管理してきた世界に類のない組織の設計計画の展開をたどるコンパクトな辞典ともいえます。同機構の都市デザインチームの初代リーダーをつとめた建築家・木下庸子氏の解説は、150万戸あまりの住まいを実現してきた設計手法から製品開発、団地管理に至るまでの長年月にわたる関係者の努力を描き出していると同時に、緑が豊かに成熟した団地の「いま」を動かしている時代の流れも浮き彫りにしています。

住まい学大系・第103巻「いえ 団地 まち 公団住宅 設計計画史」

2月28日発行、小B6判、本文540頁、定価：本体3,000円＋税
発行／住まいの図書館出版局（株式会社住まいの図書館）

晴海団地（1957年 670戸）、阿佐ヶ谷住宅（1958年 350戸）、ひばりが丘団地（1959年 2714戸）、常盤平団地（1960年 4839戸）、赤羽台団地（1962年 3373戸）、住吉団地（1970年 1240戸）、高島平団地（1972年 10170戸）、芦屋浜高層住宅（1979年 3381戸）、タウンハウス諏訪（1979年 58戸）、木場公園三好住宅（1982年 96戸）、東雲キャナルコートCODAN（2005年 1712戸）など、各時代のさまざまな規模の55団地を、現地視察と当時の資料を踏まえて解説。さらに、1923年から2011年にわたる詳細な住まい史年表、104項目に整理した設計手法案内、日本住宅公団からUR都市機構の展開を語り合う座談会などを加えている。

■目次

はじめに 公団からURへ／第一章 風景としての集合住宅団地／団地五十五 配置図集／第二章 団地五十五／年表／主な受賞／キーワード／参考文献／団地遺産としての景観／団地設計の現場から

■著者紹介

木下庸子（きのした・ようこ）

1956年、東京生まれ。建築家。1977年スタンフォード大学工学部卒業、1980年ハーバード大学デザイン学部大学院修了。帰国後、内井昭蔵建築設計事務所を経て、1987年設計組織ADHを渡邊眞理と設立。2005年から2007年、UR都市機構都市デザインチームのリーダー。現在は工学院大学建築学部教授。主な作品には、湖畔の住宅（1987年）、NT（1999年）、SN（2001年）などの住宅の他、日本基督教団ユウカリが丘教会＋光の子児童センター（2000年）、白石市宮鷹巣第二住宅シルバーハウジング（2003年）、アパートメンツ東雲キャナルコート（2005年）、ヌーベル赤羽台（2006年）、真壁伝承館（2011年・2012年度日本建築学会賞作品賞）、吉見光の子保育園（2013年）など。主な著書には、「孤の集住体」（共著・住まいの図書館出版局）、「集合住宅をユニットから考える」（共著・新建築社）、「設計する身体をそだてる考えを伝える図面の技術」（共著・彰国社）など。

植田実（うえだ・まこと）

1935年、東京生まれ。編集者、建築評論家。早稲田大学第一文学部フランス文学専攻卒業。雑誌「建築」編集部、「都市住宅」編集長、「GA HOUSES」編集長を経て、現在は住まいの図書館出版局編集長。2003年度日本建築学会賞文化賞を受賞。主な著書に、「ジャパン・ハウス 打放しコンクリート住宅の現在」（写真・下村純一、グラフィック社）、「真夜中の家 絵本空間論」（住まいの図書館出版局）、「アパートメント世界の夢の集合住宅」（写真・平地勲、平凡社）、「集合住宅物語」（写真・鬼海弘雄）、「都市住宅クロニクル（全2巻）」、「真夜中の庭 物語にひそむ建築」、「住まいの手帖」（以上みすず書房）、「植田実の編集現場 建築を伝えるということ」（共著者 ラトルズ）など。

（参考）第一期「住まい学大系」全100巻

既刊の第一期「住まい学大系」全100巻は、生活者の柔軟な発想と建築家や研究者の仕事の成果が交差する、社会に開かれた、誰にでも語りかけられる読み物として多くの読者に親しまれてきました。全100巻の中には、90点におよぶ主要作品の紹介とともに自身の住宅設計への思いを綴った—安藤忠雄著「家」（第76巻）、戦後住宅史に残る名作といわれる自邸「私の家」の半世紀を描いた—清家清著「私の家白書」（第80巻）、シュールな感覚とラディカルな論理で建築の原理を模索し続ける住宅論—原広司著「住居に都市を埋蔵する」（第30巻）など、著名建築家の著書も多数含まれています。

